

# 諸

問題（理念的な） 長島 確

第二部は諸問題。第一部とはスタイルを変え、もうちょっとシリアスに、研究所の重要な問題を、個別に見ていこう。順序は必ずしも時系列ではない。執筆者は引きつづき長島 確。

## ひとつひとつは小さくて、多様な偏り

つくりかた研究所は二年目以降、体制を一新し、研究室ごとの活動が中心となった。だから全体の流れでは説明しにくいのだが、概要だけ見ておこう。

研究室体制と同時に、有志を募り、全体の事務や連絡を担う事務局を置くことにした。各研究室は、年度の初めに企画書を出し、それが通れば活動予算（制作費）を得ることができる。この審査は長島と佐藤（慎）が担当した。研究室ごとの活動はバラバラで、各自に任せられる。二年目の冬には、各研究室が活動を発表する合同のイベント（「だれかのみたゆめ 展示と実演」）を行った。三年目もほぼ同様の流れだが、発表会のようなものはない代わりに、東京アートポイント計画におけるこのプロジェクトの最終年度なので、創設者の権限で、研究室ごとにこのドキュメントへの参加を義務とした。

研究室体制。これはアートプロジェクトをさらに小さくさせた、一種の社会実験だった。アーティストでもマネジメントのプロでもない者たちが、どうしたら、何かを自分たちの手で進めていけるのか。自分たちで課題を見つけ、企画にし、実行する。このプロセス（「つくりかた」）を試すためには、ある程度の裁量の自由が必要だが、規模が大きすぎると手に負えなくなる。大きすぎると、よくも悪くも「プロ化」し、効率的に遂行しないとかたじけなくなくなる。そのことは一年目に痛感したし、また「プロ化」がこの研究所で取り組むべき課題でないことも、よくわかった。

だから、チャンスを細分化し、小さなチャンスが複数あるような状況が必要だと考えた。チャンスはそのまま、リスクと言いかえてもよい。小さなチャンスなら、自分たちで心配できるし、失敗も、基本的にそのサイズで済む。そして数があれば、成功も失敗もあって当然であり、いくつか失敗があっても、他の成功でカバーできる。ところがこれが、プロジェクト一丸となって大きなワン・チャンスに全実存を賭けてしまうようなかたちだと、万が一失敗したときに、プロジェクト全体が潰れる。失敗も大事な研究対象であるつくりかた研究所にとつても、その意味で初年度の振る舞いはかなりリスクだった。

こうした考えは、保身のためではない。東京アートポイント計画のような、公的な財源（この場合、都民の税金）に支えられた活動枠のなかで、自分（たち）の活動の公共性

を、どのように考えるかという問題である。ここ数年、アートプロジェクトに関わってきた、行政の事業だと、公平性を気にするあまり、「極論として、何をするにも「すべての納税者」や「すべての住民」に還元できない」といけないような気になってしまっているのが、重荷だった。アートは尖ってなんぼ、偏ってなんぼ、その尖りや偏りが思わぬ力を発揮するはずだが、それを公平に均せば均すほど、毒にも薬にもならないものになってしまう。これは公共事業としてのアートプロジェクトの抱える矛盾だと思う。それを避けるには、万人に支持されるような大きなひとつの事業など目指さず、逆にそれぞれ違った偏りかたをした小さな事業を、無数に集めて、それで結果としてさまざまな期待や要望に応えられるようなかたちにするしかない。しかない、というか、それこそが文化／社会の多様性であり、この多様性が許されないと、どう考えても生きづらい。

話が大きくなったが、研究所も、二十数人とはいえ、やはりひとつのことをみなで、というのは窮屈だった。その結果の細分化であり、研究室体制というかたちで、再スタートを切ったのだった。

## 自治と「市民自治」

研究室体制へのシフトチェンジとともに、「自治」が考えるべきキーワードとなった。

このキーワードは、数年前に企業メセナ協議会の加藤種男さんの口から聞いたのがとくに印象的で、ずっと気にかかっていた。加藤さんは「市民自治」が大事だとくりかえし仰っていて、私も参加していた「すみだ川アートプロジェクト」の運営委員会（「肝煎」という面白い名で呼ばれる集まり）でも、ディレクターの独裁ではない、自発的、水平的な運営組織の重要性を説いていらした。

つくりかた研究所の自治について考えるとき、もうひとつ、私のなかで結びつく出来事がある。研究室というアイデアが出た直後の、二〇一三年一二月初めのことだ。

その日は、上野でチェンバロの演奏会を聴いた後、国会議事堂周辺のデモに来ていた（雰囲気のアマリのギャップに驚きながら）。夕方、特定秘密保護法案が参議院の特別委員会で強行採決され、今夜中にも本会議通過か、という状況で、夜九時を過ぎても議事堂周辺は反対のデモで騒然としていた。私は法案そのもの以前に、「一部少数のトップだけが情報をもち、スピーディーに判断をすればよい。あとの者たちは知らなくてよい、黙って乗っかっていけばよい」というような考えかたに反対だった。当時はそういう考えかたが、

政府にも、ビジネスの現場にも、いま以上に強くあった気がする（いまは慣れてしまっただけかもしれないが）。とはいえ、デモの現場に着いてみると、絶対の自信をもって声を張り上げ、反対を叫ぶ、コールの最前線にも、気後れして加われないのだった。

もらったプラカードを片手に、居場所を探してうろろした。そのとき、デモの群集から少し距離を置いて、地下鉄駅の出口付近に、ちょっと違う種類の人たちがいることに気がついたのだった。

彼らはいがい若者で、男女どちらもいたが、ほとんど一人で来ているようだった。とくにプラカードを掲げるでもなく、声を上げてコールに加わるでもなく、でもじつと立って、その場に居続けるのだった。私の勝手な推測（自己投影）かもしれないが、彼らはふだん、積極的に政治に関わろうとはしなさそうだが、それでもいま進行している問題に、居ても立ってもいられずやって来て、しかし声を張り上げる自信もなく、最小限の主張として、「（疑問をもっている人間が）ここに（も）いるよ」と姿をさらしているようだった。

デモは効果がないから無駄だ、という人がいるが、私はそうは思わない。デモは議員や議会に向けてやっているのでは、じつはない。社会のどこかで迷い、疑い、自信をなくしている人に、「同じ考えの人がここに（も）いるよ」と姿をさらして示してみせる行為なのだと思う。

そういう、静かなデモンストレーションとして、群集からちょっと距離を置いて立っている彼らの姿を見たとき、政権の主導に乗っかるでもなく、逆に反対派の勢いに乗っかることもできない、この温度の低い、しかし何かを考えようとしている第三極の「自治」こそが、いまの日本に必要なんじゃないかと、ひどく勝手に確信したのであった。乗っかれないうのなら、自分たちで考えるしかない。

これまた突飛な連想だが、この夜、この彼らに混ざって立ちながら、研究所の研究員のことを考えていた。バスの企画発表の際に、上から評価されることにあれほど反発をし（演劇の学生の集団ならああいう空気にはならなかったと思う）、しかし何かをしたくて集まってきた研究員たちが、この第三極とどこかで重なっているような気がした。

このバラバラの、いわば「乗っからない」人たちが、自治を探る場としての研究所。そうだとしたら、研究所は何者として、誰に向けて、「ここに（も）いるよ」と姿をさらすことになるのだろうか。



## 拠点のない場所

活動をするのに（どんな）場所が必要か。

つくりかたの研究所は、あえて場所をもたずに始めてみた。この得体の知れない研究所が、具体的な建物をもつのはなかなか想像しにくかったし、「東京のどこかにあるらしい」というような、都市伝説めいた実体感のなさが似合っているとも思っていた。

だから特定の拠点をもたずにスタートした。

とはいえ集まる場所がまったくないと不便なので、秋葉原のアーツ千代田3331という建物内にある、アーツカウンシル東京の部屋を、必要なときに使わせてもらうようなかたちにした。キックオフや全体のミーティングも、やがて研究室体制になってからの、個々の集まりやワークショップのようなことも、だいたいこの部屋で行った。

場所のないのが似合う、といった曖昧な理由の一方で、もう少し積極的に、「場所がなければどうなるか」という実験を試みたい気持ちもあった。ちょうど研究所を始めるころ、イギリス・ウェールズの新しい国立劇場（ナショナル・シアター・ウェールズ、以下NTW）の活動を知り、感化されてもいた。

NTWはウェールズの二番目の国立劇場（ウェールズ語だけを使う国立劇場が先にあり、

それにつづく、英語を使う劇場)として、二〇一〇年にオープンした。いちばんの特徴は、建物をもたないことである。ふつう国立劇場といたら、立派な建物を建てそうなものだが、彼らはあえてそうせず、ウェールズ国内を月ごとに移動し、そのつど場所を変えながら、初年度一年間で一三か所、一三本の作品の上演をした。驚くべき機動力である。

面白いのは、「国立劇場」自体が国内を移動することだ。今月はこの町に「国立劇場」があり、翌月はあそここの山が「国立劇場」になる(既存の施設にかぎらず、屋外の公演も多かった)。相撲の巡業のようでもあり、「国立劇場」の概念やイメージがゆらぐ、こういう感じはとても面白い。そのぶん大変な労力がいるはずだが、彼らはハコモノの所有・維持管理に予算を使うことをせず、その代わりすべてを人件費とソフト(制作費)に注ぎ込む判断をしたのだ。彼らももっている固定の場所は、カーデイツにある事務所と、あとはウェブサイトだけである。

つくりかた研究所は国立劇場ではないし、規模も意味合いも比較にならないほど異なるが、場所をもたずに、そのつどふさわしい場所が「研究所」になったら面白いだろうな、と思っていった。表札だけつくつてもち歩こうか、とも考えていた。

ところが、実際に活動を始めると、占有できる場所がないというだけで、面倒くさい実務的な問題がつきつきともち上がった。3331の部屋は、アートポイント計画の他団体

も利用するので、当然のことながら鍵の管理が難しく、使えるタイミングも、いつも自由にとりわけにはいかなかった。多少の備品を置くロッカーはあったが、部屋の使いかた自体、基本的にそのつど原状復帰が必要だった。

フリーランスの働きかたとして、ある時期ノマドという言葉が流行ったが、個人レベルでも実際に場所をもたずに仕事をするのは、けっこう大変である。パソコンや周辺機器は、どれだけ軽量になってももち歩くには重いし、それらを広げて仕事に集中できる場所を探すだけで、心身ともに消耗する。さらに複数人での打ち合わせ(話だけならまだしも、机を広く使った作業)となると、場所を選ぶ。内密の話もしにくい。スカイプなどを使う手もあるが、これはすでに人間関係が築けていて、話し合う目的がはっきりしていないとうまくいかない気がする。新しいメンバーで集まって、漠然と「何か」を始めようとするには、やはり直接顔を合わせる場所がないと難しい。

研究所でも、二年目以降、拠点は必要か否か、という議論が起こり、他のアートプロジェクトの拠点を訪問取材させてもらうなど、調査から始めることになった(居場所研究室、というのが開設された)。とつと場所を借りてしまえば楽なのに、そこがまた研究所らしいところでもある。全員が集まれるような大きな場所が必要ないが、せめて事務所的なスペースはほしい。ではそれが東京のどこにあるのがふさわしいのか……。悩み始め

るとキリがなく、二年目の終盤にはみないかげん研究所の進みの遅さに飽き始めていた  
ので、最後は、偶然タイミングよく出会った物件に、えいっと決めてしまった。豊島区上  
池袋にある古いアパートの一室で、前年「としまアートステーション構想」というプロジェ  
クトの一拠点（としまアートステーションY）として使われていた物件だ。

こうしてつくりかた研究所は、三年目になって、やっと自分たちだけの場所をもつこと  
になった。個人的には、占有できる場所があることがしみじみとありがたく、もつと早く  
もつべきだったと思う。

ただし、拠点の問題はこれで解決したわけではない。アートプロジェクトの拠点はどこ  
にあるべきか、という問題がある。

アートプロジェクトが比較的、地域密着型であるかぎり、拠点はその地域にあるのがよ  
い。ぜんぜん別の場所にあつたら不便だ。地域との関係も結びにくい。運営する団体（N  
POなど）の事務所が別の場所にある場合は多いだろうが、それは拠点とは呼べない。

言いかえれば、ある土地に拠点をもつということが、そこでプロジェクトを行う、とい  
うことの証となる。拠点をもつことが、地域に対して「ここで活動します」という表明に  
なるし、拠点がそこにあることが、その地域を活動の対象やテーマとすることの根拠にも  
なる。

それはまた、地元ができる、ということでもある。メンバーがそこに住んでいるかどう  
かは関係なく、そのプロジェクトにとつては、拠点のある土地が地元となり、ホームとな  
る。だから、「墨田区で活動しています」とか、「豊島区でやっています」と、人にも説明  
しやすい。東京アートポイント計画という枠組み自体、そういうふうに、都内の土地々々  
に、アートのポイント（拠点）をつくることを推奨している。

だが、「つくりかた研究所」の拠点というのは、それと同列に語れるだろうか。この研究  
所に、地元やホームがありえるのだろうか。個々の研究室の活動のレベルでなら、特定の  
土地と関係をもつことはある。また、各メンバーには当然地元がある（いま住んでいると  
ころであれ、出身地であれ）。けれども、そんなふうに土地に根を下ろすことから、あえて  
離れたところで成立しようとする関係や活動は、どのように場所をもちえるのだろうか。

## ロゴと実体

得体の知れない組織であるぶん、ロゴは重要である。

つくりかた研究所のグラフィックデザインを担当している福岡泰隆さんとは、「アトレ

ウス家」のプロジェクト以来の付き合いだ。私自身の（あまり豊富でない）経験からすると、デザイナーには二種類いて、こちらが細かく具体的に注文をつければつけるほどよい結果が出てくるタイプと、むしろ根本的なアイデア（コンセプト）だけをしっかりと伝えて、あとは丸投げに等しいくらい思い切ってお任せしたほうがよいタイプとがいる。

福岡さんは間違いなく後者だと思う。

だから福岡さんに依頼するときは、核になるアイデアだけはしっかりもって、あとは考えるヒントになりそうなネタ（これは打ち合わせのプロセスのなかで大事な手がかりになるが、最終的には絶対にこの通りにならない、つまり捨てゴマになることを覚悟しておかないといけない）をいくつか用意して、話をする。もちろん福岡さんだって、こちらの注文通りにやってくれと言えばやってくれるだろうが、黙っていたほうが、こちらが自力でイメージしていたよりはるかに面白いものが、絶対に出てくる。

研究所に関しては、あやしい感じがほしい、ということから始めた。あやしい、といってもいろいろあるが（怪しい、妖しい……）、研究所の名称の「つくりかた」をわざと平仮名にしたのと同様、どことなくやわらかくとぼけた感じがほしい。硬く、権威的な研究所にはしたくないと考えていた。そこで参考に、漫画家の杉浦茂や、絵本作家の佐々木マキの本をもったいった。絵本や昔の子供向け漫画に出てきそうな「けんきゅうじょ」のイ

メージである（煙突から「あやしいけむり」が出ていそうな、と伝えた記憶がある）。

二時間ほどの打ち合わせで、福岡さんは研究所のコンセプト（第一部の初めに書いたような）をふんふんと聞き、私の持参した絵本や漫画もひととおり眺めて、帰っていった。

それから三週間あまり。福岡さんから送られてきたのは二案。片方は絵本や漫画的な「あやしさ」を踏まえ、肉太の文字がぐるりと丸まったりした、なるほどユーモラスなものだ。

しかし、もう一案は、そういった装飾をほとんど排した、構造だけでできていると言ってよいものだった。文字自体にはほとんど飾り気がなく、ただ「長島確のつくりかた研究所」の一字ずつがバラバラに配置されていて、星座のようにそれを短い線が結んでいる。線を順にたどれば、ちゃんと名称が読めるのだが、あちこちへんな位置で折り返した配置のせいで、本来続かない文字が隣り合って、例えば「島のり」とか「つくた」とかの文字列がぱっと目に入ってくる（海苔？ 佃煮？）。「研究所は直線では行かないだろうな、あっちへ行ったりこっちへ行ったり……そういう紆余曲折の、面倒くささが出ると思います」とのことだった。しかもこれは、文字を線でつなぐ、というルールだけでできているので、それさえ守れば自由に変形可能で、いくらでもバリエーションがつくれ、どんなスペースにも収まるのだった。さらには、やはりこのルールを守るかぎり、手書きでも、メールなどのテキストでも、自分でつくることさえ可能なのだった。

福岡さんの本命は間違いなくこっちで、私も望むところだった。実際、研究所はこのロゴの通り、あるいはそれ以上に混迷を極め、渦を巻いたり、伸びたり縮んだりした。

## お客化する世界

自治を掲げる研究所の歴史は、「お客化」との戦いの歴史だった。お客化、というのは、もてなされる立場に慣れること、世話をされて当然、と考えるようになることである。また逆の立場から、過度に気を回し、世話を焼きすぎて、いつの間にか相手をお客化してしまうこともある。役割分担や、人に委ねること、任せることは必要だが、ほんのちよつとした意識の角度のずれで、お客化は容易に起こる。

ふつうお客化は本物のお客（購買者だったり、観客だったり）に起こり、度が過ぎるとクレマーのようなかたちで問題となるが、購買者や観客ではない立場の者にも、お客化は起こる。研究所でいえば、初期には長島が気を使いすぎて他のベテランや研究員をお客化してしまったり（過保護）、スタッフや事務局が一生懸命がんばるほど、他の研究員が

次第にお客化してしまったりと、さまざまなレベルやシチュエーションで発生した。

サービスする（させられる）側にとってはブラック労働問題（奴隷化）、サービスされる（お客化される）側にとっては愚鈍化が起こりかねない。もちろん、適度なもてなしは、するほうにも満足感があるし、されるのも嬉しいものだが、限度というものがある。

公共事業としてのアートプロジェクトでも、行政が納税者や住民をどこまでお客化しているか（しているのか）、考える必要がある。

またその一方、あまりに（または一切）もてなさない、お客にすべて自分で何とかしろ、というのも、別種の暴力でありうる。その意味で、自由放任へ舵を切った研究所は暴力的だが、研究員たちはお客ではないのだから、そこはしかたがない。

いずれにせよ、お客化は、自治とは相容れない。「ちよつと待て、お客じゃないんだから」というツツコミを、絶えず用意しないといけない。相手にも、自分にも。

ちなみにツイッター情報によると、《お客さまは神様》という（いまや暴力に等しい）フレーズに対して、《神は死んだ》とニーチェを引用して返した猛者の店員がいたらしい。



## 逆進（その先は沼）

研究所が自分たちで何かを進めようとする、*「逆進」*とも呼ぶしかない現象が起り始めた。この用語が正しいのかわからないが、ここでは、前へ前へ進むより、手前へ手前へと遡っていく運動を指す。

研究室体制となり、全体の運営も有志の事務局で進めてみよう、となつてから、活動の速度が目に見えて遅くなつた。研究室体制にしたのは、少人数のグループになれば動きやすくなるはずだと考えたからで、しかも各研究室内の物事の進めかたは合議制でも独裁制でもかまわないことにしていたから、それぞれやりやすいように決めればよく、どんな活動は進むはずだった。

研究所全体としてはトップダウンを避けて自治の方向へ舵を切つたけれど、それはトップダウンや独裁がダメだということとは違う。どういう決めかた、進めかたを選ぶか、そのことから自分たちで考えようということであり、そのプロセスこそが、つくりかた研究所の研究対象になるということである。

しかし、これは予想以上に面倒なことだった。

打ち合わせをするにも、日取りと場所を決める前に、それをどうやって決めるかを決め

ないといけない。打ち合わせの決めかたを決めるために打ち合わせをしないといけない……。そのためには、まず話し合つて……。

物事を進めていくことは、すなわち決断を下していくことであり、小さな決定の積み重ねで、いろいろなことが進み、かたちになってくる。モノをつくるとはそういうことだし、プロジェクトを進めるのもそういうことだ。

でも、つくりかた研究所は、「つくりかたから考える」がゆえに、何かを決める手前に広がっている、深い沼に落ちてしまった。手前から手前から、馬鹿正直に考えようとした結果、肝心の議題になかなかたどり着かないのだった。

こういうときは、こうして決めるのがいい、こんな場合は、こうするとすぐ解決できる、というような知恵は、本当に役に立つし、ありがたい。けれども、そのことに慣れて、何も考えなくなると、自動化が始まる。何かを量産するならそれでいいが、われわれがやっていることは、量産するようなことなのか。また、われわれのやっていることの意味は、結果を出すことにあるのか。そうでないとしたら、こういう停滞、または逆進とも呼ぶべきような、物事の進めかたの検証作業に、いったいどんな意味があるのか。わざわざ何のために、こんな面倒くさいことをするのか。

個人的にこの問いに対する答えの方角だけは、割とはつきりしている。それはやはり、

自治のためである。

## 遅さの発見

二年目の一二月に、『だれかのみためゆめ 展示と実演』というイベントを開催した。名前のとおり、複数の研究室による「展示」ないしは「実演」の場で、六つの研究室（十有志のイベント）が参加した。初年度に全員で取り組む課題として計画していた企画（パス）が流れ、年度が変わり研究室体制になって、あらためて合同の発表の場をもとうというものだった。全体のディレクションは研究主任（ベテラン枠）で演出家の中野成樹。

企画の募集が夏から始まり、準備は秋になって本格化した。これがなかなか進まない。中野を筆頭に、所長の佐藤（慎）、長島あたりは、すでに秋口から時間がないことに焦り始めていたが、この焦りが各研究室と共有できないことがまた問題だった。それぞれ研究室なりに焦っていたのかもしれないが（本当に土壇場になってからはさすがに火がついた）、イベント本番から逆算していつごろまでに何ができていないとヤバイ、という感覚が、どうも共有できない。

私がとくにヤキモキしたのは、集中作業に踏み切るかどうかの判断だった。研究室が取り組んでいる課題やアイデアが面白いのはわかっており、それをしっかりかたたちにできれば、きつとよい活動成果になる。短期間でもそれだけに専念して仕上げれば、かなり質の高いモノになる。だが実際の研究室の活動はあまりに遅く、のんびりしていて（そう見えた）、このままではかたちにするチャンスを逃すと思った。研究所全体の進行に関しては、無理に介入して加速はさせないようにと考えていたけれど、このイベントに向けた具体的な制作物については、ハッパをかけ、急がせたほうがいいのではないかと、真剣に悩んだ。だが、ふとこれは、自分がふだん関わっている、プロの仕事のしかただと気づいたのだ。何かを仕上げるのに必要な時間の目安を立て、とくに短期集中で時間を確保して、えいやっと仕上げてしまう。その呼吸は確かに大事で、有効確実なのだが、これは、そういう作業を職業としているプロのやりかたに違いなかった。別に仕事をもち、生活しながら何かをつくっている場合、こういう集中的なスケジュールの確保は不可能なのだ。

平日は仕事をして、夜だけ、または、休日だけ、何かをつくる。それは、平日の仕事時間に職業として何かをつくるのとはまったく違う時間感覚である。そういう時間感覚のなかでのつくりかたとはどんなものなのか。また、そうやってできあがるものの質を、たんにつくる時間配分が違うというだけのものとして、プロと同じ評価軸ではかることができ

るのか。プロと同じ評価軸で評価し、「足りない」と見えた場合、プロ化すれば解決するの。プロ化、というのが、技術的な優劣・巧拙の問題というより、生活時間における專業の度合いだとすれば、あえてプロ化しない方向に、別の道はないのか。

そのうえで、ひとつの問題。楽器の演奏において、音楽としてきちんと成立させながら速く弾くことは難しいが、それと同じか、もしかしたらそれ以上に、遅く弾くのは難しいのだという。技術だけでなく、集中力も関係しているだろうか。実際の経験として、仕事をしながら、とびとびの休日だけを使って何かを進めることは案外難しい。短期集中ならかたちに見えるものも、時間をかけると変質し、こちらも飽きてきたりして、続かなくなってしまう。たんなる思いつきや、一時の盛り上がりだけでは、遅いペースで続けることはできない。本人が本当にやらずにはいられないこと、やめられないことでないといけない。

## 問題の問題

研究所の活動を進めるうちに、「問題」について考えるようになった。

とくに「自治」をキーワードに、研究室単位で活動を始めてから、たくさん問題が現れてきた。多くはごく実務的なレベルで、いろいろなことを決めたり進めたりするのに必要な、知識やノウハウ、スキル（がないこと、足りないこと）が問題だった。こういうことは、誰かに教わったり、試行錯誤したりしながら、身につけていくしかない（身につけていけばいい）。

それとは別に、もう少し感情的というか、メンタルな問題も現れてきた。例えば、他の人に気を使うこと。遠慮がちなこと。それらは必ずしも悪いことではないが、誰か一人がえいっと飛び出すのを恐れて、全体的にブレーキがかかり始めた。または、何となく全体が動き始めた後も、こんどは遅い人に合わせようとして、やはりブレーキがかかることがあった。こうなつてくると問題だ。あまりの遅さに、ほとんど止まっているんじゃないかと思うような瞬間（というには長い時期）もあった。ものすごい同調圧力が働いて、空気の粘性がねつとりと上がったかのような時期もあった。おそらくその一方で、あまりの遅さにイライラしたり、もういいや、自分は知らん、と思った人もいたはずだ。

主に気づかいかから生じる問題（とくにブレーキ）は、研究室がそれぞれ動き出し、研究員同士の関係もできてくると、次第に解消されていった。自然に発生した道路渋滞が、自然に解消していくような感じだった。時間がかかるけれど、時間が経てば解決するのだった。とりわけ二年目に顕著だったこういう問題を、創設者の立場としてどうするべきか、私

はかなり迷った。もちろん、相談されれば応える。個別にはアドバイスもし、必要ならテコ入れもする。けれども、積極的に介入するべきなのか。そうはしなかった。そして、こんなふうに関心があるのは、ネグレクト（育児？放棄）じゃないのか、責任の放棄ではないのかと、たえず考えた。もちろん私自身の怠惰や、他の仕事の忙しさもあつたけれど、迷うたびに、積極的な無為を選んだ。

なぜかという、もう一步先の「問題」が見えてきたからだ。

ここで唐突だが、アートの話。

アートの役割は、問題の発見にある、という言いかたがある。アーティストの思いも寄らぬ発想によって、政治や経済が解決するところか気づいてさえいないような問題が、発見され、提起される。そのことに意味がある、というわけだ（問題を起こす、ということと、ときに紙一重でありながら）。

または、アートが、問題の解決までもたらず場合もある。必ずしもアートが発見したのではない、しかし他の手段では解決に行き詰まった問題を、アートによって解決しようとする。このときアートは、既知の手段とは別の、問題解決の手段でありえる。

アートプロジェクトと呼ばれるものは、従来のアート以上に、こうした役割を期待されている気がする。あるいは関係者が、日頃こういうロジックでもって、アートプロジェクト

トの存在意義を説明しようとしている、ということかもしれない。いづれにせよ、そのこととはよい。アートは役に立ったり意味があつたりするべきではない、と主張する人もいるだろうが、そういうアートもあればいいし、そうじゃないアートもあればいい。

つくりかた研究所は、アートプロジェクトとしてスタートし、さまざま問題に直面してきた。それは実務的なレベルの問題から、メンタルな問題まで、多岐にわたつた。だがやがて、「問題」そのものを、もう一步踏み込んで考えずにはいられなくなった。

ある哲学者がこんなふうに書いている。いわく、人は問題の解決、答えばかりを重視するけれど、その前に問題自体を検証することが必要だ。問題が正しく提起されれば、おのずと正しい答えが出る。しかし、提起がそもそも間違っていたら、けつして正しい答えにはたどりつかない。だから、問題それ自体の真偽（当否）から考えないといけない。

これは、数学（算数）を例に考えるとわかりやすい。算数の文章題から、正しく式が立てられれば、答えはおのずと出る。しかし、式が間違っていたら、正しい答えは絶対に出ない。言いかえるなら、式を正しく立てることは、問題を正確に捉えることと同義であり、またそれは、問題の解決に直結する。そしてそのための発想・ひらめきは、ときに創造的だ。数学における新しい概念の発明の歴史は、「問題」の発見・創造の歴史だといえる。その発見・発明によって、それまで考えることのできなかつた新しい地平が、突

然拓けてくるのだ。

しかしわれわれは、このように「問題」自体を問うこと、発見・発明することに慣れていない。学校教育において問題を与えるのはいつも教師であり、生徒はそれを解く訓練ばかりさせられている。社会においても同様で、われわれは与えられた問題の解決ばかりを求められ、問題それ自体から考える自由をもてずにいる。これは一種の奴隷制に他ならない。(G・ドゥルーズ『ベルクソンの哲学』)

「問題」から考える自由。それは学問でもアートでも生活でも重要なことのはずで、つくりかた研究所が研究室体制になつて探り始めたのも、おそらくこの「自由」だった。

しかしながら、自由とは厄介なものである。研究課題として、何を選んでよい。こう言われたとき、何を、どうやって選べばよいのか。課題を与えられるほうがはるかに楽で、それをこなすことにこそ、充実感も達成感もあるのではないか？ 自由にしている、というのは、ほとんど地獄のようなものではないか？

この「自由地獄」のなかから、いくつもの研究室が立ち上がり、そのうちいくつかは残ったが、いくつかは消えていった。廃墟か残骸のようになっていくものもある。またその一方、きちんと立ち上がるに至らないまま、しかしいつまでもたっても消えないものもある。

それはなぜだろう。ドゥルーズは、「問題」のもうひとつの側面として、暴力性について

でも語っている。真に重要な問題は、暴力的に襲いかかってくる。解かすには生きていられない。そういう問題だけが、解くに値するのであり、解いても解かなくてもよい問題は、取り組むだけ時間の無駄だ。その意味で、本当に切実な問題に対して、人は受け身である。好きなときに問題のほうへ行ったり行かなかったりできるわけではなく、問題のほうか、否応なくこちらにやってくる。はじめは正体不明の暴力として、謎として、襲いかかってくるその何事かを、人は問題として発見し、正確に提起しなければならぬ。

こういう問題観は、問題をアイデアに置きかえると、よくわかる気がする。考えても考えなくてもよいアイデアは、思いついたときどんなに興奮しても、どんなに面白そうでも、すぐに忘れてしまう。それに対し、考えるのをやめることのできないアイデアというものがある。アイデア自体が謎として、呪いのようなものとして、べったりと貼りついて、考えるのをやめさせてくれないことがある。そういうアイデアを、どんなふうにも企画などのかたちにしていくのか。またそもそも、そういうアイデアに、謎に、問題に、どうやって出会うのか。

気をつけなければいけないのは、この問題の訪れ(襲来)は、例えば教師から問題を与えられることは、似て非なるものだということだ。発見済み・提起済みの問題を与えられるのでは足りない。何かをきっかけに、襲ってきた問題を、問題として自分で発見し、

自分で提起しなければならぬ。

この意味で、問題を提起することと、研究室を立ち上げることは、ほとんど同義である。研究室の名称はそのまま、扱おうとする問題の名だと言ってよい。

結果として残った研究室は、そのメンバーにとって、何かしら価値のある問題に出会ったということなのだろうし、消えていった研究室は、問題にそこまでの価値がなかった（または、即座に解決されてしまった、または、問題がまだはるか遠くにある）ということかもしれない。そして、よくも悪くもプロ化せず、生活のなかでこうした活動を進めていくには、何らかの、切実な問題、考えずにはいられない問題が相手でない、足りない。そうでなければ続けていくことができない。

あとひとつだけ、問題の大きさについて。研究所の二年目にあたる二〇一四年に、別の仕事で二度ほどパレスチナへ行く機会があった。イスラエルによる占領政策を間近で見、考えさせられた。それはパレスチナの人びとの強いられている、ひどい人権侵害の境遇についてでもあるけれど、同時に、それと比較して、自分の住んでいる東京の問題についてだった。

パレスチナの場合、占領という恐ろしく大きな問題が襲いかかっており、対処する態度に多少の違いはあっても、占領が共通の問題として認識されていることはまず間違いない。

かたや東京は、はるかに平和であるが、では問題がないのかというと、そんなことはまったくないと思った。むしろ、みなが共通の問題として認識・共有できるような大きな問題がないだけで、当事者にとっては深刻な、しかし全体から見たら小さな問題が無数にあり、しかもそれらは、年齢や性別や住む地域や職種や雇用形態や、その他さまざまに微細なカテゴリーによって分断され、属するカテゴリーがちよつとでもズレると、もうそれが問題であることすら認識できないような、ものすごく細分化された状況に、われわれは生きていくのではないか。

震災は日本にとって大きな共通の問題であったし、いまもそうであるけれど、あつという間に細分化され、共有されにくくなってしまった。東京という場所では、そのような細分化の力が、あらゆる分野にわたって、とくに強く働いているような気がする。大きな問題に襲われるのは不幸だが、小さすぎて他人と共有できない無数の問題に覆われているのも不幸に違いない。

もちろん問題は辛く苦しいものばかりではない。だがいずれにせよ、そういう小さな問題に、どう向き合っていくのか。それらを誰が、どうやって発見し、共有し、解決していくのか。行政や経済ができることもたくさんあるが、そこからこぼれるものも無数にある。こぼれたものをアーティストがすくいとることもあるが、アーティストとはかぎらない者

がすくい取ることもありえる。だが、どうやって？

そのためには、小さな、小さな、試行錯誤が必要である。無数の、多様な、自治による試行錯誤が必要である。何かを始めるために、バカバカしいほど手前から始めなければならなかったり、関係をつくるために、呆れるほど長いこと、しゃべらなければならなかったりする。最終的なアウトプット（作品）の質ではなく、プロセスの質（とは何か）を高めるために、とんでもなく面倒な回り道や足踏みをしなければならなかったりする。

この試行錯誤ができる、実生活とは別の、もうひとつの時間と場所。しかもプロでもアーティストでもない人間でも、それを試せる時間と場所。というところに、アートプロジェクトの価値はあるのだと思う。

そのための基礎研究が、つくりかた研究所。

三年間かかって、このあたりまで考えた。